

修士論文要旨

研究テーマ：認知症カフェにおける作業療法士の役割と課題の検討—インタビュー調査と生活行為向上マネジメントの実践を通して—

学籍番号 m1670025

氏 名 工 藤 元 貴

研究指導教員 竹 田 徳 則

概 要

目的

- (1) 認知症カフェにおける専門職または OT に求められている役割の検討
- (2) 認知症カフェ参加者を対象に MTDLP の介入による変化を明らかにする

方法

認知症カフェの運営スタッフ 7 名を対象とした個別インタビュー（半構造化面接）による質的研究（研究 1）と、認知症の人と家族 7 組を対象とした MTDLP を活用した介入研究（研究 2）である。

研究 1 の分析方法としては、認知症カフェにおける専門職または OT に求められている役割を検討することを主たる分析目的として、帰納的に分析を行った。インタビューデータを逐語録にし、文脈ごとにコードを付し、全ての対象者の類似するコードを概念として集約し、カテゴリーを生成した。小カテゴリー、大カテゴリーの順に集約し、それぞれのカテゴリーには内容を表す名称をつけた。類似する大カテゴリーはテーマに集約し、内容を表す名称をつけた。

研究 2 では、MTDLP 実施前後に認知的介護評価、PSMS、IADL、DASC-21、認知症の人の生活意識を家族に対する聞き取りにて評価した。MTDLP 実施後は、再度認知症カフェに参加した際（約 1 か月後）に、再評価と認知症カフェでの MTDLP 活用の質問紙、プログラムの実施状況と作業目標の実行度と満足度を評価した。解析方法としては、認知的介護評価、PSMS、IADL、DASC-21、認知症の人の生活意識の質問紙、MTDLP 作業目標の実行度・満足度に関して、MTDLP 実施前と実施後の 2 時点を記述統計にて比較した。

結果

研究 1 では、全 262 コードのうち認知症カフェにおける専門職または OT に求められている役割コードは 65 件あり、13 個の小カテゴリー、5 個の大カテゴリー

ー（認知症の人への支援とボランティア教育，家族・地域住民・スタッフへの知識や情報の提供，スタッフ・家族が感じる安心感，専門職のネットワーク構築，専門職自身への効果と期待される参加姿勢）に集約され，【専門職が認知症カフェに参加する意義】テーマとした。

研究2では，MTDLP実施後，実施前に比べてPSMSとDASC-21が7名中1名，IADLが7名中3名で変化ありであったが，介護負担感は7名全員が軽減，介護肯定感は7名全員が増加であった。認知症の人の生活意識では，生活目標への視点，環境設定等の工夫への視点の項目では「あまり考えない・全く考えない」から「ときどき考える」へ7名中3名が変化し，今後の生活行為向上への期待では「あまり考えない・全く考えない」から「ときどき考える」へ7名中2名が変化したが，認知症の人の困難事に関する項目では7名全員に変化がなかった。認知症カフェにおける認知症の人へのMTDLPの活用に関しては，MTDLPの「目標設定が分かりやすかった」が7名全員，「プログラム立案が分かりやすかった」が7名中4名で半数以上だった。一方，「日常生活での悩み解決に至った」という回答はなかった。

結論

認知症カフェへの専門職参加により，スタッフが感じる効果や期待として，家族・地域住民への認知症に関する知識や情報の提供と，スタッフ・家族へ与える安心感等が考えられたが，課題として，認知症の人への支援とボランティア教育の必要性が示唆された。これらには専門職のネットワーク構築が関係していると考えられた（研究1）。また，認知症カフェ参加者へのMTDLP実施では，家族の介護肯定感形成の可能性があり，その要因として残存機能の明確化，目標・プログラムの共有を図ることが考えられた，しかし，認知症の人のIADLへの効果はみられなかった。認知症カフェでのMTDLP活用上の課題として，本研究では，プログラム実施の場が自宅であり，プログラム提供者が家族のみになってしまった為，多職種や他のサービスとの連携や，認知症カフェの場においてプログラム実施できるように地域住民やボランティアの協力を得る工夫の必要性が考えられた（研究2）。